様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３１３

研究課題名（和文）世阿弥時代の能詞章の系統に関する遡源的研究

研究課題名（英文）Genealogy of Noh text of Zeam's period

研究代表者
竹本　幹夫（TAKEMOTO, Mikio）

早稲田大学・文学学術院・名誉教授

研究者番号：９０１３８１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,600,000円

研究成果の概要（和文）：　４年間を通じ、当初予定していた研究目的をおおむね達成することが出来た。すなわち世阿弥時代の能本と現存謡本諸本との関連につき、曲ごとに系統を示すことが出来た。また世阿弥自筆本が現存しない能の系統につき、いくつかの作品を取り上げて考察した。この考察の過程で、同一人物による同一曲の書写・節付本を比較することを初めて行い、そこに夥しい小異が存在することを発見した。これらのことから、謡本の詞章が時代を通じて常に流動しており、多くの異文が派生する可能性が常時存在したことが判明した。
　なお同時並行的な作業として番外謡本諸本の翻刻・校合を行い、現存する番外謡本のほぼすべての本文作成を完了することが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究により、能が時代的にどのような変遷を経て、世阿弥時代から現代へと伝承されてきたのか、その伝承経路を知ることが出来るようになった。また能のような、言語芸術である文学作品とは異質の戯曲台本が、常に本文を流動させていたこと、ただしその多くが小異に留まり、基本的には世阿弥時代の台本がおおむね現代にまで継承されているという事実を実証的に示すことが出来た。これらの発見は、室町時代の能と現代の能との、詞章面での距離の近さを保証するものであり、現代の能を中世後期の文化遺産と位置付けることを、たんに感覚的にではなく、理論的に可能にするものである。我が国伝統文化理解の一助となることは疑いない。

研究成果の概要（英文）：Over the course of four years, I am able to accomplish most of the research objectives we had originally planned. In other words, I am able to show the relationship between the Noh books of Zeami's era and the existing chant books,Utai-bon and their lineages for each piece. In addition, I have discussed the lineage of Noh plays for which Zeami's own handwritten manuscripts do not exist, by examining several works. In the process of this study, I compared transcriptions and versebooks of the same piece by the same person for the first time, and found that there were numerous minor differences. These findings indicate that the text of the chant book was always in flux throughout the period, and that there was always the possibility that many variants could be derived from it.
　Concurrently, I reprinted and collated the text of the various books of Bangai-Utaibon, and completed the text for almost all of the existing Bangai-Utaibon.

研究分野：日本中世文学、とくに能楽

キーワード：世阿弥　能本　謡本　謡曲　番外謡　版行謡本　本文系統論　校訂本文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)世阿弥自筆能本の存在する〈盛久〉などの作品の場合、現存謡本諸本と世阿弥自筆本本文との間には、非常に大きな隔たりがあるが、その理由は不明であった。報告者が代表を務めた、科学研究費補助金「能テキストの網羅的調査・系統分類と『謡曲大成』の作成」(基盤(A)2001-2004年)、「室町期成立番外謡本の網羅的調査・系統分類と『謡曲大成』の作成」(基盤(A)2005-2008年)、「江戸期以前の番外謡曲本文校訂に関する基礎的研究」(基盤(B)2012-2015年）などの研究事業を通じて、謡本の系統論を進めてきた中で、現存謡本の系統関係がある程度まで明らかになり、世阿弥の改訂本文が現存謡本に反映しない理由についても、演劇台本の場合は上演に先立って戯曲原作にその場限りの小改訂を施すことが多々あり、世阿弥能本の改訂についても、同様の可能性が考えられることに気付いた。『申楽談儀』に見える、上演直前の楽屋で世阿弥が〈丹後物狂〉の改訂を行った逸話が、能にもそのような改変が行われた可能性の根拠となる。改訂の形跡が僅少の能本については、それが初演もしくは、未定稿段階の能本である可能性もあることにも思い至り、これらが今回の研究の構想の骨格となった。

(2) 以上により、世阿弥時代の能本と謡本との関連について、①現存謡本諸本の系統関係を明らかにすること、②現存諸本と自筆能本との影響関係の有無を詳細に分析検討すること、③世阿弥自筆本の内、とくに被相伝者が明記されない宝山寺旧蔵本について、それらの能本の性格を考察すること、④これらの作業を通じて現存諸本と世阿弥自筆能本との直接的な系統関係の有無を判別し、それぞれの理由について考察することを構想した。

２．研究の目的

(1) 世阿弥時代の能本から現存謡本がどのように派生し、現在に至ったかを解明するのが、本研究の目的である。

(2) また謡本本文の校訂のあり方について、新たな視点からその方法を提案することをも目指す。そのためにこれまで未完了であった、室町期に成立したことが確実な番外謡本で翻刻未了の、100曲余の翻刻作業を実施する。

３．研究の方法

(1) これまで未完了であった番外謡本の校訂作業を完了すると共に、世阿弥時代の能本と現存謡本諸本との校合を行う。校合は現存謡本の節付までも対象とする。

(2) 世阿弥時代に成立したことが明らかな能の内、謡本の詞章に大規模な異同が存在してその分岐点を想定出来ない事例を抜き出し、それらの謡本の節付・本文の校合をおこなう。

(3) 番外曲になっている世阿弥時代から存在した可能性の強い作品を選び出し、室町時代の謡本が存在する作品と江戸期番外謡本にしか伝本が存在しないものとに分け、前者について、系統上により大きな異文が存在するものを中心に、節付・本文の網羅的な異本校合を行う。後者については、比較的伝本が豊富に伝存する曲を選び、同様に校合を行う。

(4) 世阿弥自筆本の内で謡本が伝存しない孤本についても、廃曲化の理由につき考察を行う。

４．研究成果

(1) 番外曲の翻刻作業は順調に進展して、ほぼすべての番外謡本の翻刻を終了することが出来た。年度別に翻刻終了曲数を示すと、2017年度23曲、2018年度1曲、2019年度33曲、2020年度54曲の合計111曲で、未翻刻作品のほぼすべてをカバーすることが出来た。曲ごとに2～5本の異本を翻刻している。前からの作業分を含め最終的に275曲の番外曲翻刻本文が完成した。

（2）世阿弥時代の能本のうち、金春大夫家旧蔵・宝山寺現蔵の「江口」「柏崎」「知章」の３本については、金春系の謡本の系譜に直結する可能性がある。ただし〈江口〉〈知章〉は世阿弥時代の能本のみならず謡本諸本間の異同が少ない。世阿弥自筆本との異同の比較的大きな〈柏崎〉については、室町中期に金春家に伝来した能本の目録である『能本三十五番目録』に「カシワザキ」と「マタカシワザキ」の両様の記事があり、２種の伝本が伝来していた可能性がある。現存する世阿弥自筆本は禅竹が世阿弥もしくはその親族から預かった本、散佚したもう一本が現存諸本の祖本となった禅竹相伝本である可能性がある。これは世阿弥自筆本と現存謡本との異同のあり方から推測可能である。

（3）この他の「雲林院」「多度津左衛門」「盛久」「弱法師」はいずれも禅竹相伝本ではなかった可能性がある。このうち「雲林院」については、当該本に基づき禅竹が改作を施した可能性がある。

（4）「多度津左衛門」は本来世阿弥の息男の元能相伝本であったものが、禅竹に預けられ、世阿弥の子孫に返却されないままに忘失されたものと思われる。上演の機会がまったくなかったらしいのもそのためであろう。本来の被相伝者の元能が当時出家していたことも、忘失の原因となったろう。

（5）「盛久」「弱法師」については、なお精査を要するため結論は差し控えたい。〈弱法師〉は作者元雅存命中の永享 4 年 3 月に伏見宮御所で矢田猿楽が上演しており、元雅妹聟の禅竹も相伝を受けていた可能性もあるが、正長 2 年奥書の現存世阿弥自筆本臨模本が禅竹相伝本の写しである確証はない。世阿弥自筆本「盛久」は応永 30 年 8 月奥書で、当時 19 歳の禅竹にしては年記が早過ぎる印象がある。

（6）応永 21 年に世阿弥の弟四郎と当時 17 歳のその子元重のために書かれたらしい観世文庫蔵の世阿弥自筆能本「難波梅」は、現存諸本の祖本的な位置にあることが想定可能である。その他の応永 34、35 年元重相伝の３曲「松浦」「阿古屋松」「布留」はいずれも廃曲化した。「布留」相伝の 2 ヶ月後の応永 35 年 4 月を境に、新将軍義教の愛顧を背景に大いに座勢を伸長させた元重の世間的評価に対して、曲名内題の下に朱書された芸位が中三位という、結果的に著しく低い格付けとなってしまっている。相伝当時としては至極当然の格付けと思われるものの、そのことが原因で、後年廃曲化された可能性が考えられる 。

〈引用文献〉

①表章『鴻山文庫本の研究』（わんや書店 1965 年）
②竹本「作品研究『盛久』」（『観世』1973 年 5 月）
③表章「作品研究〈柏崎〉」（『観世』1976 年 11 月）
④香西精「久次本知章」（『世子参究』403～406 頁、わんや書店 1979 年、初出『銕仙』1971 年 5 月）。
⑤月曜会編『世阿弥自筆能本集』（岩波書店 1997 年）
⑥表章「音阿弥の父観世四郎」（『観世流史参究』77～78 頁、檜書店 2008 年）
⑦落合博志「世阿弥の本文改訂―世阿弥自筆能本の改訂箇所を読む」（『文学』11-5、2010 年 9 月）
⑧矢野環「『謡曲の詞章から見る能作者の特徴―特に世阿弥とその時代―』（科学研究費・挑戦的萌芽研究 2011～13 年度）研究成果報告書」（2013 年）
⑨竹本「世阿弥自筆能本をめぐる諸問題」（早稲田大学演劇博物館『日仏国際共同シンポジウム《演劇と演劇性》報告集』2014 年）
⑩大谷節子「世阿弥自筆本「カシワザキ」以前」（『国語国文』2014 年 12 月）

⑪坂本清恵「金春禅竹の胡麻章－施譜法とアクセント反映度」(『論集』2015 年)
⑫竹本「古典演劇という幻想―生きて流動するもの―」(岩波書店『古典について、冷静に考えてみました』2016 年)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 竹本幹夫	４．巻 182
２．論文標題 現行非所演演目と室町期地方猿楽の独自演目	５．発行年 2017年
３．雑誌名 国文学研究	６．最初と最後の頁 PP31－45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹本幹夫、入口敦志、江口文恵他全７名	４．巻 41
２．論文標題 『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年閏三月・四月分）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 演劇研究	６．最初と最後の頁 PP17-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹本幹夫	４．巻 683
２．論文標題 能〈熊坂〉小考	５．発行年 2018年
３．雑誌名 銕仙	６．最初と最後の頁 PP3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹本幹夫	４．巻 186
２．論文標題 世阿弥時代の能本相伝と作品改作	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国文学研究	６．最初と最後の頁 PP56-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 入口敦志、江口文恵、田草川みずき、深澤希望・柳瀬千穂・山吉頌平・竹本幹夫	4．巻 42
2．論文標題 『葛巻昌興日記』能楽関係記事稿（貞享三年五月～十二月分）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 演劇研究	6．最初と最後の頁 PP17-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 66
2．論文標題 早稲田大学図書館所蔵古活字玉屋謡本について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 早稲田大学図書館紀要	6．最初と最後の頁 PP1-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 単行本
2．論文標題 能における中世的身体	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本の舞台芸術における身体（ﾎﾞﾅﾍﾞｪﾝﾄｩｰﾗ・ﾙﾍﾟﾙﾃｨ監修/晃洋書房）	6．最初と最後の頁 PP85-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ
2．論文標題 伊達家旧蔵能楽資料について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 能楽研究所デジタルアーカイブhttps://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken_material/htmls/dateke-htmls-201903/index.html	6．最初と最後の頁 PP1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫、入口敦志、江口文恵他全７名	4．巻 43
2．論文標題 『 葛巻昌興日記能楽関係記事稿』（貞享四年正月~六月分）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 演劇研究	6．最初と最後の頁 PP33-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 1
2．論文標題 能の作者	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『〈作者〉とは何か』岩波書店	6．最初と最後の頁 PP183-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 429
2．論文標題 能の祝言	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立能楽堂	6．最初と最後の頁 PP22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 692
2．論文標題 研究十二月往来373：〈草紙洗小町〉小考	5．発行年 2020年
3．雑誌名 銕仙	6．最初と最後の頁 PP4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 23
2．論文標題 特別寄稿 駒澤大学仏教文学研究所公開講演会録 世阿弥と 仏教	5．発行年 2020年
3．雑誌名 駒澤大學佛教文學研究	6．最初と最後の頁 PP3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本 幹夫	4．巻 65
2．論文標題 芸能市場としての寺院	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中世文学	6．最初と最後の頁 PP16-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24604/chusei.65_16	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 17
2．論文標題 室町期謡本を校訂する	5．発行年 2020年
3．雑誌名 能と狂言	6．最初と最後の頁 PP69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本幹夫	4．巻 706
2．論文標題 研究十二月往来388： 〈 松風〉 改作論再説	5．発行年 2020年
3．雑誌名 銕仙	6．最初と最後の頁 PP4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹本幹夫、入口敦志、江口文恵他全７名	４．巻 44
２．論文標題 『 葛巻昌興日記能楽関係記事稿』（貞享四年七月~十二月分）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 演劇研究	６．最初と最後の頁 PP37-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹本幹夫	４．巻 19
２．論文標題 『曾我物語』と曾我物の能	５．発行年 2021年
３．雑誌名 能と狂言	６．最初と最後の頁 PP30-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹本幹夫	４．巻 26
２．論文標題 日本文学研究と日本学	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 PP57-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 竹本幹夫、入口敦志、江口文恵他全6名	４．巻 45
２．論文標題 『 葛巻昌興日記能楽関係記事稿』（貞享五年正月~六月分）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 演劇研究	６．最初と最後の頁 PP57-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　10件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 現代能の継承と発展：中国語通訳付き
３．学会等名 シンガポール国際戯曲学術検討会2017（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 世阿弥時代の能本改作と相伝のあり方についての問題：日本語
３．学会等名 ＥＡＪＳ（ヨーロッパ日本学研究集会／2017リスボン）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 能の作者：現代の能楽研究への道のりと能の作者像：日本語
３．学会等名 Japanese Theater, Publishing Culture, and Authorship　An International Workshop at Columbia University　March 2-3, Friday-Saturday, 2018（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 三島と能；フランス語通訳付き
３．学会等名 Colloque international　Corps et message ： De la structure de la traduction et de l ’ adaptation Mercredi 21 mars 2018（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 謡本の校訂について
３．学会等名 能楽学会第17回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 能とは何か
３．学会等名 2018.10.15-16 Yanai Initiative イベント “2 Days of Noh”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 能が古典である理由
３．学会等名 早稲田大学表象・メディア論学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 能の作者
３．学会等名 早稲田中世の会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 シンポジウム「中世の仏教と芸能」：芸能市場としての寺院
３．学会等名 中世文学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 世阿弥と仏教
３．学会等名 駒澤大学仏教文学研究所公開講演会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 コメンテーターとして登壇のため題目なし
３．学会等名 伊海孝充： 科研費基盤研究C「 江戸時代初期に お け る 謡本出版過程と そ の 文化的背景に 関す る 研究」 成果報告（ 招待講演）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹本幹夫
２．発表標題 『曾我物語』と曾我物の能：シンポジウム「曾我兄弟の伝承と能―歴史・物語・芸能―」
３．学会等名 能楽学会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

1．著者名 竹本幹夫	4．発行年 2019年
2．出版社 檜書店	5．総ページ数 28
3．書名 対訳で楽しむ　葛城	

1．著者名 竹本幹夫	4．発行年 2020年
2．出版社 檜書店	5．総ページ数 32
3．書名 対訳で楽しむ　卒都婆小町	

1．著者名 竹本幹夫	4．発行年 2021年
2．出版社 檜書店	5．総ページ数 30
3．書名 対訳で楽しむ　善知鳥	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関